

911.3
力
地

枯
尾
並

地



十月廿五日共桃隣出武江而既旦
 義仲寺望芭蕉之墓歎唱



いつれをの風のしるむきその言のしめ
 おもそひし秋のりまらちから林なあ
 つらの眠り小笠原の病つめのほせをなま
 めかして枯ゆゑあそむとよひほいし
 一なるをくらむらぬしるまのぬ其間ハ
 する契あそむ生あのをいぬあなる

十月廿二日夜海行

嵐音

十月をばめりとはらりちるる

志くはゆのゆく一竹師の音 沙志

溢のよみ二るハ五るこくまて 百里

立みきうんねる沖の船江 神叔

るはのいつくよ白き 東潮

志の鵜さこひして三まハ 浮生

蜀木のおをこしきりて畑中 卜宅

一葉のぬあしそよふしちをぬる 舟行

新川をさくもつらぬ橋のへ 桐雨

るのあつて思くとも 月下

存をよれをさゆり田植もも 風洗

後かけつとも 柳下

物平のまのる途 咸字

赤ひ葉よるし黄なよるを喚 牧人

し之解して次きよる 常歌

おとよしして床をとる月 限鉤

あるをもおよつておし 東灘

下

山宮とよ敷をいふ所の

山宮

よ敷をいふ所のなを悉くして 浮世

にありしものなるをいふはみるを 見る

只あそびの内の柴垣を 氷花

の空をいふなるをいふし 山宮

くいひて後身の断せ入る 神叔

法門のふ乃火をいふは 赤御

まらふたなる物なりて送るなり 百里

城の近しと縁こころとある 神叔

今年のみよわきらしく今年いひの火 山宮

おむかひおあると母の氣をい 氷花

あそび凡長吹者ユルをの月 赤御

先んなるものなる御走なつて 百里

いふものなるものなる御走なつて 神叔

中山道におあるとある 山宮

一糸を糸の價のともいふし 赤御

さら代とありとある先 氷花

いふのにおあるとある先 赤御

やまの雪の降るうたむすは 緑子

満座追善義口焼香

ちよよ人の涙も回すの秋作 百里
えおさめの歌はいつ比高の比 氷花

悔前非

あまうらむれしおんたしなれおの月 神教
言一ま人の心にあまこけの音 浮生
田のあふ一何さあや曇の月 舟行

つらけそくれおのまの根は傾し 感字
ほやうまなこなあも月は白 志を
うらまもえんをらもさる潮臣 志願
あまもしらのあまもさるあ 素衣

芭蕉のあみまうらあまの志を
とてさしひらうらうらうら
秋風よなむしてさるし 秋も
あま乃芭蕉のあまれす中 安適

十月十日酉日

なみもまじく。旅よりと逆旅

るおのゝこころとおとひをて

侍のふもいさおのふとおまあ 桃隣

淡くみろふまこの日のま 子珊

西へ一歩ふた小松見やそ 秋風

まきし一歩をいりあすこ 徳水

女月ハ名飯りくるしりり 芳良

いさしやら軽ふ秋の惟子 序志

皂莢の枝をくもさう野のあ 太土

初子りへん古梅の底 亀水

心よこいのほ枝をも惜まそ 孤危

三里うらもろし景の陥境 子祐

け寒さあしぬ雪のふる白雲 利牛

好錦の重るよよのまかん 白之

脊戸はてしなくもせ 整三

おるふも水し潮のうら 李也

やれくと平泉もろもろの月 肥後

大福せきまき布の唐錦

大浴

さむいよ陰に流し山岸のもし

八葉

俵のしるゝ燕のあつまる

桃川

そらこころをこほりてほろ

利会

たけふけりて遮りのこぼる根

也

酒ちりしそらこほりて

支梁

風言まとして路敷るま

湖松

さあらんそらこほりて

相笑

さあらんそらこほりて

嵐戎

丁寧ふみ地灯を差して

石菊

凡そまきし音の柳地つく

ちり

極のほも若葉もさうりかきまて

穴竹

向ふよ柳のせりしなまき

此節

ありまてしあねをさる月の初

素龍

け脚うらうらまゝる秋風

千川

よいかもさしほりて

桂舟

流しそらこほりて

南蕉

飛るたのうらうら

杏村

八つやうと改ゆをうけん為の松
 おしとそぬ款おやまおのまきとに
 菊うらうと白と情も居士衣也
 山茶花をて物の類は杖もやん
 うき便を籠らうとあしし
 筆のむを白いもゆんもろと
 刀ん送うもさうまゆらうと
 骨肉ようとゆらうとゆらうと
 栗おほて菊をともはのちるに

太夫 湖松 子胎 太極 序志 亀の 孝子 楚舟 凡弦

悲しむと包みころもあはれ
 ちの花よふさむらじを牡丹
 ころけいよたき世にさめ下
 物さるるわいしうけのまゆを
 うこつんまあまのりしもの
 それ器しうやうまの他を
 もやあしそたの枝よのたき
 なしころ繩屋さしひを花
 袖あはれあまのいんちうい
 角魚

桃川

牡丹

下

用陽

杏村

石人

高良

清波

角魚

花仲きくはる

法眼

沙もんはもぬきさしは川
 先てよそ一死教をうしぬ山
 花みよふころとよまてはな
 錫杖よふころかきさる木地
 泣くくと目よ吹かぬよのま
 おまおらり惚いさし
 子向らるるやれ沙面院
 時よのうら白い平都明あし
 山夕
 露沾
 山夕
 直方
 聖風
 濁子
 壺蛙
 山蓮

李吟

露沾

山夕

直方

聖風

濁子

壺蛙

山蓮

悲しむを包みこころもあはれ
 ちの花もさくらもむかしを牡丹
 ころ形もやぶさき世も昔の下
 物もさくらもいよもいよの向を
 うこころもあはれこころの狂作
 ぞ此輩もさくらもあはれ
 もさくらもさくらもあはれ
 なるこころもあはれ
 袖もさくらもあはれ
 角葱

桃川

那し

互好

用陽

杏村

石人

善良

清波

角葱

美伸寺の遺る碑

沙もいよもあはれ
 先ていよもあはれ
 花もいよもあはれ
 錫杖もいよもあはれ
 泣くともいよもあはれ
 おもいよもあはれ
 子もいよもあはれ
 時もいよもあはれ

法眼

李吟

露沾

山夕

直方

聖風

濁子

壺蛙

山蓮

聖徳太子のらむや十宗よこのま
小遣や火のさるる山にさるるの凍
け人の徳や十おのるらま
笠もみつや袖のまの夜
言さし心そはるる山のま
力物にむらむらなるま
高やまぬるむんむのま
枯島のま水やぬるまのま
まのまのまはるるまぬるま

涼葉
大舟
た柳
比呂
千川
潤泉
支那
ト子
托京

心はむらむらなるまぬるま
こや飛ぶる菴のままはるる
ほのまはるるまや托京
お千二年のまのまぬるま
既陀体ままも袖のま
そのまをさるるま托京ま
心はむらむらなるまぬるま
風のまらむらむらまぬるま

共井
海助
蓬池
ちと
鹿若
魁子
馬克
素乾

十月廿五日追善

旅るそやあ、此たのわ紫梅

一為はらし、まの船る

破淀^{ツカ}、月、浪おして

那、の言のうけ、石、山

秋中、お、は、し、花、の、空

ま、草、の、ま、を、り、と、ま、り

内、の、物、や、り、う、な、人、つ、ふ

ち、ろ、く、る、の、ま、を、回、り、下

湖春

紫梅

船

浪

石

山

花

空

その形、舟、を、ま、り、る、百、合、の、志

電、の、火、く、し、店、を、ま、り

ま、り、の、ま、り、つ、ち、を、り、死、折

帆、を、り、舟、を、り、ま、り、る、こ、り

山、陰、を、り、い、あ、つ、め、し、竹、梅、を

を、り、ま、り、侍、す、く、急、を、り、神

膳、所、の、月、片、隅、を、り、照、り、る

二、つ、つ、し、て、あ、り、ま、り、秋

ま、り、ま、り、葉、を、り、ま、り、て、押、葉

利牛

杉風

素龍

筆

刺

石

水

秋

押葉

酒とくしきひそかやしく

利平

笑ふんもおもをなぬ興を

孤を

立く多しつるもの

徳を

志あし海をけい

桃隣

ふたの地力のこ

利元

ちこの叔借りるさ

地波

家あまふとふ

杉風

物事のきりふ

利平

財取てぬふ

孤を

の— 舞の上をか

徳山

はらりも水も

桃隣

ふくを信徳の者

杉風

本の通く

聖城

きり牛のさつ

孤を

小あけをうけ

利平

ニ三人向か

聖城

高しはのれり

徳山

袖あす師の好

桃隣

やうに優美なるよりの夕日
利名

十月廿九

三子高しそるり

今もくも高の石を伝の光也

仙化

かつくをふくふて並に

是者

夕の月黒く云はれは影に

介我

拭いけりせり階行くる

柴下

高き山に人や居る所の底は

信徳

燈つえよなき人よも影を

松風

用におもひはれは猿の

介我

月高の光に江のさやに世の

当吹

掬まひつれをさけく西く

湖月

用のたのよやさみのたのころ

柴下

神くれはまのあひのさみ

暮子

かこちの月根さしは

拙山

野を葉をむののの

周指

力竹とらゝるゝゝゝゝゝゝ 松嵐 山嶺
 栗きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 芭蕉 冥玄
 十徳の袖いたゝゝゝゝゝゝ 紅色
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 和氷
 句の種でひひひひひひひひ 芝蔴
 さゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 一雀
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 是書
 ありゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 林也
 雪のおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 孝下

一ゝゝゝの輪極つゝゝゝゝゝゝ 湖月
 昼の三用つゝゝゝゝゝゝゝゝ 非叙
 ちゝゝの向もせゝゝゝの陽の日向けて 揚水
 力もよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 松風
 行人をよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 由之
 雀の枝もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 全峯
 日向の端もゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 治徳
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 孝下
 空羽たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 神叙

小僧のたふしとさきみつく

抄の

扇く扇陸のしんた月のはる

柴草

側のかさこの白ひらき

化化

まのせしれはきしと母よまし

抄の

ちいさきねのくまむ例の又

孝下

ま貝の草しるまじしてまのこ

庭月

日芝様よ似やふさる飯

柴草

か—のひらきとたれ—のた

介抄

のひらきのちくまきとたれ—のた

神叙

なつめとがんとま—のた

松風

あ—の踵—のた

海月

墓—のた

介抄

—のた

法徳

—のた

化化

生—のた

抄の

午の月よ鳥留子のたの直子

孝下

ニリ—のた

全孝

きしたく—のた

神叙

つみを濁してのよ米 由之
 肩癖のあしはなまじしるを 仙化
 何れもたうらふ年除るお 介我
 常とていじゆんを拵さのたよま 位徳
 垣せぬ柵もくんの敬きい 湖月

深草下のおきれ宗派石土を讀して
 いまもや友同月う家旅泊と
 道草ののおもひまよひ

鏡の鏡うめよふ鏡のくれを素堂

窓の音はしい果るる 拂子 亀翁
 青石の陰もあし水や木葉を 横儿
 枝のむよ拵まよさるる 景概
 りよよめぬ訪うとくくちお柱 萍水
 ちのうらや 勝もかこてお鏡 野原
 木の枝を掛て老いぶく 孤危
 油火のけし悔もやあさ 利半
 すのうらく枝も拵る 柳 疎雨
 泣きぬるあさやうの通り 然水

深川よりついでにわなまき 石葉
月めはるよまはちしとちやが 利金

義仲さまの事の上師の御ゆゑに
四斗もはくせんはくも隠色の
志よつらんしきさるものもたも
なつぬさる里にまは里を隔てり
の甚めのまはつたよふさのまよ
らるるを

月よりはれの菫や七折 桃歌

十一月十二日 初月忌

九山量阿弥亭 興行

嵐亭

泣中よ空を菊をまら 耐へる

向上舞をとろの暇をの 桃隣

流聖のいさるを運く病をも 岩翁

車よまはるお敷の思なり 晋子

はる吉貝をく先なるちよもた 亀翁

くはるよまはるお敷の思なり 横儿

名月よ扶桑が一程おもしろしけり

尺牘

お久しよほと唐兒桐の葉

松翁

白粉の陰よりわら 秋のまゝ

去来

火燈子あそびの引くぬり

正秀

七花鼓の山よありける時

曲心

極の木のらむは海をたまた

筆

吹るもは風を膝に押し

徹士

鼓を鳴らし大かくりなき

心主

のまぬもとをえんも人なき

暮四

雪をすすめて舟をりん

巨海

蜻蛉の糸釣つてうぶや

荷今

湯あぐりの力の冷うり

即童

弓池のひらゆるやを

風國

山あめり帯氣都る

集加

獅子の舞ふる心や花の法

晋子

杖より月なまの秋を

重勝

くら年和尔や世の備法

進臣

塩辛梅子なみし

瑞士

樓

雨の日は大に晴る

窓

心は空を飛ぶ

横

花は春を告げる

岸

舟は水の上を渡る

東

山は雲を巻く

足

道は旅を導く

雲

鳥は空を翔る

窓

心は空を飛ぶ

敬

一は多を成る

きしりめをよもぢきんあして

櫛隣

おのふ麻呂んやぬす人しほ

岩翁

のうれもホシくろ柱杖衣之

横儿

こやも川し海に鶏匹

巨海

牛糸さきしするあ女子あ

尺牛

力なるんで酔のまもむゆ

連皇

わらあてそいなるうらちん

徹士

年裁すす尺板の掃地

落分

肥肉なるも北のまきくちあなる

集加

三

梵天寒くき川少を

高四

灯も因も流しくせん

風音

不思議な娘をちきり

吉本

白濁のさむらる志をいん

岩翁

おそきちいももうふ延冊

牙子

三丁四里操場はるの弦の

地童

せんとよのうらちめは

遊王

あのをうらちのうらちけ

同五

ものな華もお

集加

湖を蘊イサスふくむる山の景 尺中

さるといふ字をさるの世の額 尺中

さりの月脚半もさるに睡はし 枕は

さこそしなしく壺柑信ぞ 巨海

かニラさりの橙ちこくさる柿もも 三回

こしもろろ尻もく飼猿 岩あり

おしるゆかに東ツキ隨留のさるて 撒土

おしるのさるゆかに念 集加

産るや色いろさる男の子 三回

さるちしるる 乾夕の酒 風玉

さるおしるのさるちとあるて柏かし 横丸

憐あはれと叩たたさる絶たふをさる 尺中

たよりさるる依よはの人心 枕は

たよりのかかさるる 暮トキ日 三回

思おもふのさるるしとさるる月つきの酒 心玉

さるる著あるるさるるさるる 尺中

さるるはもさるるさるるさるる 尺中

さるる門かどさるる垣かきの山やま 去耳

米⁺うにしうあいて通る坂舟 集加

地蒸るも建一 岩の浮橋 音子

筆の制れしはよを枯し 岩の

うしつ山すゝある市松 嶽土

天井を舟を交して色を靴 尺中

うふ刈込や里のな物 荷分

秋の霞のぼくむハツチ 横儿

あはきいあるうの腹掛 心是

浅形の竹つるしうの月 嵐音

きるら此着もと母のせうやく 聖童

おきく痛は付属の浅橋なり 岩の

はちう風をとけ馬の牛 風木

ゆりし赤飯くもる大井飯 集加

おのしあうる百世のう 音子

目のおよぶさしるる陸橋なる 嶽土

け脚のつらなはてを 尺中

何風よつらき洞をこもあはせ 心是

新大橋のうをしう成 去年

此一册者... 寺町二卷上听... 重勝判

此一册者... 寺町二卷上听... 重勝判

追加

龍義仲其六也

惟然

花... 隅... 同... 花... 隅... 同... 花... 隅... 同...

かーらうすまそし橋おむの音 遊刀
草拵くろくろくつとくしとたうへて 木竹
新居居の鯛ふきものむ池刺 猪草
角浮きくくかまぬぬ申風 胡故
なまう詞ふらぬの 谷物 埴屋
ちやふあてしりーと構あまきみ 智目
せもぬる 移りの袖まきまき 佐然
蕙ふ伸もて出らん竹の流 正房
新うま申こい鹿山々る月 臥言

新うま申こい鹿山々る月 昌房
あまを情出してまきまき 遊刀
ころくろくと花よ夕りの入まゆし 木竹
はくしの株まきまき 胡故
隙おし隙つ水とけりの風 真墨
まうみちち新の柏よめけり 角芝
むつしと名あまをを隙まき破り 押芝
おりんあつあてまきまき 微房
新うま申こい鹿山々る月 臥言

冬の静かなまじまじとぬる
 ぞと牡丹櫛ふはるなすま
 灯のく周のいふなりおこ
 篋むしこふの静かなる
 あつちの草すしあやあ
 草鞋ははたふりや野田の
 あつちの静かなる
 みあつちの氷ははるや
 泣かして加減のまじまじ

解
 之
 如
 珠
 胡
 苧
 朱
 里
 野

高麗のつとをなす
 草のふれははるや
 泣かして加減のまじまじ
 泣かして加減のまじまじ
 泣かして加減のまじまじ
 泣かして加減のまじまじ
 泣かして加減のまじまじ
 泣かして加減のまじまじ
 泣かして加減のまじまじ
 泣かして加減のまじまじ

蘊
 支
 竹
 流
 教
 柯
 及
 鳩

一 養月十六日芭蕉翁三十五日
於養仲寺真行

桃野

墓とく蓮の香を拵り氷を

ゆるぎしあくるあまの戸 智月

政とんまをゆるぎの行りて 正秀

四句目あり略す



寺所 二条寺丁
井筒庄兵衛板

